

## 一般演題

**1.  $^{123}\text{I}$ -IMP Acetazolamide 負荷脳血流シンチグラフィによる片側および両側性閉塞性脳血管障害例の検討**

大山 洋一 富口 静二 辻 明徳  
 銚島 光子 吉良 朋広 中島 留美  
 高橋 瞳正 (熊本大・放)

目的：片側性病変と両側性病変において Acetazolamide の脳血管に対する反応性の違いを両者間で比較検討する。

方法：安静時および Acetazolamide 1 g 静注後 15 分目に  $^{123}\text{I}$ -IMP 165 MBq を静注し、15 分後に SPECT を施行した。前頭部、側頭部、後頭部、視床、基底核、小脳について視覚的および健側および病側のカウント比を用いた半定量的評価により血管反応性を検討した。

結果：1) 両側群では基底核の循環予備能の低下を片側群に比べ高頻度に認めた。2) 片側群で視床、基底核に diaschisis を認める頻度が両側群より高かった。3) 両側群では全体の 20-30% の領域で反応性の評価に絶対値に近い定量的指標が必要と思われた。

**2. 失語を合併した高血圧性脳内出血例の脳 SPECT について**

桂木 誠 足立 育子 秋田 邦生  
 木村 史郎 井手口尚生 松井 正典  
 筒井 竹人 西原 春實  
                   (聖マリア病院・画像診断セ)  
 鳥越隆一郎 朔 義亮 (同・脳神経セ)  
 村上 敏子 (同・言語療法部)

失語を合併した被殼あるいは視床出血例における脳 SPECT について検討した。対象は被殼出血 15 例、視床出血 7 例である。視床出血では全例が健忘失語の状態で、SPECT 所見は比較的軽微であった。被殼出血では軽度の健忘失語から全失語の状態まで種々の状態がみられた。SPECT でも外側皮質域の軽度の低下から半球ほぼ全域にわたる高度の低下までさまざ

まであった。皮質域の低下は失語の重症度やタイプと関連があると思われた。脳 SPECT は失語評価の一指標になると思われた。

**3.  $^{99\text{m}}$ Tc-HMPAO SPECT にて側頭葉内側に低血流域を認めた transient global amnesia の一例**

石野 洋一 加藤 文雄 山本富淑弥  
 川崎 能道 村上 稔 大成 宣弘  
 中田 肇 (産業医大・放)  
 角谷千登士 (同・脳外)

症例は 54 歳男性。ソフトボール大会で外野守備についていたところボールを追っていて後方に転倒、後頭部を打撲後約 40 秒間意識不明が続き回復後も顔色が悪かったので来院。来院時、自分の名前はいえるが住所ははっきりと記憶しておらず、また当日のことは全く覚えていなかった。その後徐々に記憶が回復し、受傷前後の短期間の空白を残すのみとなつた。受傷直後の CT や 4 日後の MRI では異常を認めなかつたが、受傷 47 時間後の HMPAO SPECT にて左側頭葉内側に低血流域を認めた。2か月後の SPECT では同所見がはっきりしなくなっていた。以上 Transient global amnesia の一例に関して若干の文献的考察を含めて報告した。

**4. IMP SPECT 後期像にて欠損がみられた脊髄小脳変性症の一例**

星 博昭 陣之内正史 フローレス レオ  
 楠元 直 大西 隆 二見 繁美  
 長町 茂樹 小玉 隆男 邊辺 克司  
                   (宮崎医大・放)

症例は 54 歳女性、20 歳時に体幹失調で発症し以後緩徐に進行し脊髄小脳変性症と診断された。 $^{123}\text{I}$ -IMP による脳血流シンチグラフィ早期像にて小脳の萎縮による血流低下が見られたが、大脑半球に血流異常は見られなかつた。後期像では、小脳および後頭葉の集積が低下し、特に小脳上部、後頭葉下部内側で

はほぼ欠損となった。<sup>131</sup>I-IMP 脳血流シンチグラフィは、虚血部位などで早期像にて低下を示し後期像にて再分布を示すことはあっても、その逆は稀であるため、今回若干の文献的考察を加え報告した。

#### 5. <sup>123</sup>I-Iomazenil による脳 benzodiazepine 受容体分布の評価

佐々木雅之 一矢 有一 桑原 康雄  
吉田 毅 福村 利光 増田 康治  
(九大・放)

中枢性 benzodiazepine 受容体結合薬剤である <sup>123</sup>I-Iomazenil (IMZ) の各種脳疾患における脳内分布を、脳血流、代謝と比較検討した。対象は脳血管障害9例(梗塞6例、脳出血2例、クモ膜下出血1例)、てんかん2例、その他4例の計15例である。IMZは111～222 MBq 投与し、3時間後の画像を視覚的に評価した。脳血流との比較は15例全例で行い、血流異常が顕著:10例、同等:5例であった。7例では代謝との比較を行い(酸素代謝4例、糖代謝3例)、代謝低下が顕著:4例、同等:3例であった。血流低下、代謝正常の部位ではIMZは正常であった。また、血流、代謝ともに低下してもIMZが正常の部位も見られた。IMZにて脳血流、代謝のいずれとも異なる情報が得られた。

#### 6. 脳悪性リンパ腫に対する Ga-SPECT の有用性

重松 良典 松野 泰治  
(天草中央総合病院・放)  
矢野 辰志 嶋村 皓臣 (同・脳外)  
植村正三郎 (天草地域医療セ・脳外)  
富口 静二 高橋 瞳正 (熊本大・放)

脳原発の悪性リンパ腫3例、脾臓原発にて続発性の脳悪性リンパ腫1例を経験した。いずれの腫瘍もガリウムシンチの planar 像では描出されず、SPECTにおいて描出された。続発性の1例では放射線治療にて症状の改善が得られたが、これに伴い SPECTにおいての腫瘍の描出も減弱化した。脳悪性リンパ腫の診断、および治療の効果判定にガリウムシンチの SPECT が有用と思われた。

#### 7. <sup>201</sup>Tl シンチが再発と放射線脳壊死との鑑別に有用であった転移性脳腫瘍の1例

中村 武 辻 明徳 鍋島 光子  
富口 静二 中島 留美 大山 洋一  
吉良 朋広 松本 政典 高橋 瞳正  
(熊本大・放)

<sup>201</sup>Tl が腫瘍シンチとして日常診療に使用できるようになり、その有用性がさらに報告されてきているが、われわれも再発と放射線脳壊死との鑑別に有用であった転移性脳腫瘍の1例を経験したので報告する。

症例は58歳男性で、平成5年6月に食道癌からの転移性脳腫瘍の摘出手術を受け術後40Gyの放射線治療を受けている。その後、平成6年11月のMRIで不均一に造影される腫瘍性病変を認めたが、再発と放射線脳壊死との鑑別は難しかった。<sup>201</sup>Tl シンチでは腫瘍部分に一致して強い集積を認め、病変部と対側正常部の counts 比(L/N)は Early で 6.3, Delay で 5.4 と高く、再発と診断した。後に手術にて同部に腫瘍の再発が確認された。

#### 8. <sup>123</sup>I-MIBG 初期データの解析

土持 進作 中別府良昭 谷 淳至  
中條 政敬 (鹿児島大・放)

MIBG 初期データを解析し、その有用性について検討を行った。正常者5例と心疾患患者64例に <sup>123</sup>I-MIBG 111 MBq を静注直後より 25 分間の dynamic data と 30 分および 4 時間後の static data を得た。心臓、上縦隔に設定した関心領域内の平均カウントを用いて 25 分、4 時間後の心臓縦隔比(25 min-H/M, 4 hr-H/M) および 5~25 分と 30~4 時間の時間減衰補正後の心筋洗い出し率(25 min-WR, 4 hr-WR)を算出した。25 min-WR と 4 hr-WR, 25 min-H/M と 4 hr-H/M、および 25 min-WR と 4 hr-H/M の間に有意な相関を認めた( $r=0.76, 0.61, 0.79$ )。正常群と心疾患群との間で 25 min-WR, 4 hr-WR ともに有意差を認め、正常群に比べ心疾患群では心筋からのトレーサ洗い出しが亢進していた。早期の MIBG 解析によっても心筋交感神経機能評価が可能であると示唆された。